

2020年2月23日杉並教会説教  
マタイの福音書 22：15-22 「神のものは神に」

本日の個所で出てくるカイザルとは、イエス様が生きた時代に全世界を治めていたローマ皇帝のことです。主イエスの時代、パレスチナはローマの植民地でした。この時のユダヤの国はそれまでもさまざまな国の植民地となるという経験してきました。アッシリア帝国、バビロニア帝国、マケドニア帝国、ペルシャ帝国、そしてローマ帝国と、次々に世界史に登場する強大な帝国の支配を受けて、国民の生活はいつも不安定な状態でした。特にこうした周辺の大国によって状況が揺れ動く中で、経済的な安定を求める人々が出てきます。福音書に出てくるザアカイという人が取税人になったのも、植民地の中でローマに協力するとお金には困らないという背景がありました。

ローマの貨幣の表側には、カイザルの肖像と文字が書いてあります。「神聖なるアウグストゥスの子・ティベリウス・カイザル・アウグストゥス」という文字が刻まれています。裏側は左手にオリーブの枝を持ち、右手にはオリンピアの杖を持って神々の座に座っているアウグストゥスの母リビアの像が刻まれており、さらにそのまわりには「大祭司」という文字が見えます。すなわちカイザルは、ローマ帝国内にあっては王の王であり、祭司中の祭司とされていたのです。

イスラエルの民にとって、モーセの十戒は幼い時から骨肉となるほど教えられてきた教えです。「私のほかに何ものをも神としてはならない」（出エジプト 20：3）とのみことばを、片時も忘れず唱えてきた人たちにとって、目に見えるかぎり、強大な全世界の権力をもつカイザル・ローマ皇帝に対して、特にこの場合、直接には税金の問題ですが、どういう態度を取るべきであるかということは、きわめて大事な問題、しかしきわめて微妙な問題でありました。

ここで二つのグループが出て来ます。「パリサイ派」と「ヘロデ党」です。彼らはイエス様を畏にかけるために、カイザルに税金を納めるべきか、納めるべきでないか、と尋ねてきたわけです。

まず「ヘロデ党の者たち」というのは、ユダヤ社会の中で体制の側を占めていた貴族や大商人、大地主です。今で言えば財界というところでしょうか。いわばローマの権力を背景にして支配の座についていた人々です。ローマ植民地下において、体制側にある人々で、人頭税に対して反ローマの立場は取りません。税金について納めるべきかどうかという問いに対しては、当然ローマ政府に納めるべきであるという見解に立ちました。

それに対して「パリサイ派」は、ヘロデ党の者たちとは全く反対です。パリサイ派はユダヤ社会の大きな割合を占めている独立的な中産階級で占められていました。税金を納めるべきかどうかということになれば、納めるべきではないという、反ローマ・グループを形成していました。「熱心党」という人たちは、そのもっとも急進的な人たちということになります。

ここで、イエス様がカイザルに人頭税を納めてもいいと言いますと、反ローマの、大勢の群衆にとっては、神への忠実に反するとされ、神に対する背信行為として非難され、たちまち民衆の支持を失います。逆に納めるべきではないと言いますと、ローマへの反逆罪ということになり、ヘロデ党のグループにポンテオ・ピラトへ訴える口実を与えることになります。

そう考えますと、どっちに答えても、この両者に口実を与えない返答はどこにもないように見えました。それに対して、主イエスはデナリをお見せになって、「これはだれの肖像ですか。だれの銘ですか」と尋ねられたのです。「カイザルのです」と答えますとイエス様は、「カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい」と語られました。

第一に、この 21 節においてイエス様は「まずカイザルのものがある」と、語っているということです。

私たちにとってカイザルのものがあるということを認めることは、あたりまえのこのようで、結構難しいのではないかということです。カイザルに属するもの、それゆえにカイザルに帰すべきもの、カイザルに納めるべきものがあるということです。ここでは直接には、明らかに納税のことを言っていますが、「カイザルに属するもの」とは、それだけではありません。

日本の社会にも国の秩序があり、経済機構があり、同じ単位の貨幣と紙幣が用いられ、同じ言語が用いられ、そこには間違いなく神のみこころが働いていると受けとめることができます。現実に関今の政治にどれほど問題があったとしても、神のみこころに反して日本政府が成り立っているというような受けとめ方は、聖書が語っていることではありません。主イエスはここで明らかにカイザルのもの、カイザルに属するものがあると言ひ、それをお認めになっているのです。

たとえ今の政府に重大な問題があり、税金の不正利用があり、富の不均衡が現実にもたらされている現実があるとしても、今なお神がこの政府を立てて、政府と言う地上の権威を通して社会を維持し、人間の神のかたちとしての尊厳を守ろうとする神の意思を行おうとしているのは確かなことです。私たちが聖書に基づいて「カイザルに属しているものがある」と正しく受けとめることは大切なことです。

ですからクリスチャンはこの国の政府の行っていることに対して関心を持つ必要があり、カイザルのものにもっと真面目であるべきだと思います。今日の沖縄だけに米軍基地を押し付けている問題、原子力発電の問題、または日の丸君が代の強制と言う問題、外国人を使い捨てる安い労働力として搾取しその人権が危うい状態に置かれているという問題、歴史認識の問題等々さまざまな問題を日本の政治も日本の社会は抱えています。こうしたことの一つ一つに関心を持ち、日本政府がもっと主の御心に適い、キリストの僕となって主の御心に仕える政府になるように、日本の国が隣国に対しても軍備で脅しをかけるようなおかしな国にならないように、人権を無視するような政策を行わないように関心をもっていなければなりません。

この現実に対して、クリスチャンは、神がカイザルの権威を立てたということを知っていて、そこに神の御心と神が望んでいる意図があることを知っているのです。日ごろからカイザルのものに関心を持つ必要があるのです。もっと周辺アジアと世界の人々とさまざまな面で共に生きることができる道をさぐりながら、主の御心になう政府を創るために努力し、聖書から神が国家を建てた御心とは何かをよく学び、よく教え、社会にあっては世の光・地の塩の存在となる必要があるのです。そうしたことは、カイザルのものがあることを受けとめるうえで大切な事です。

次に覚えなければならないのは、「カイザルのもの」と「神のもの」とは、本来根本的に異質なものであるということです。カイザルのものと神のものとを二つ同じように左右均等に並べて、さあ、どちらが大切であるかというような議論は、正しくないと思います。実は「カイザルに属するもの」は、私たちが想像しているほど大きな領域を占めるものではないからです。確かに目に見えるかぎり、「バックス・ロマーナ」「すべての道はローマに通ず」とまで当時は言われておりました、時の多くの人々はカイザルにひれ伏し、ひざまずいてきました。目に見えるかぎり、カイザルは巨大な権力を持つ支配のように見えたわけです。しかしひとたび「神のもの」「神に属するもの」と比べたら、カイザルが託されている権威はきわめて小さい範囲にすぎないことを忘れてはならないと思います。

主イエスは、マタイの福音書の終わりにおいて、「わたしは天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています」と宣言しておられます。パウロも、「天上のもの、地上のもの、地下のものなどあらゆるものが膝をかがめて」、みなあなたのものとすと、神さまの絶大な御手の中に全被造物が置かれていることをほめたたえています。そして当然のこととして、私どもひとりひとりがそこに入っています。私どもの身も心も魂も生活も全生涯も、すべて「神のもの」として包みこまれています。

たとえ、この世の権力をもっているカイザルがどんなに私たちに隷属を求めることができ、絶対的な力を発揮できるように見えたとしても、カイザルがこの私の全部を包みこむことができるわけではありません。国や政府が私たちの中に占める範囲は、本来私たちの考えているよりはるかに狭い領域ではないでしょうか。ごく狭い、ごく限定された領域、税金を納めるということ。社会の平和を維持すること。福祉を増進すること。駐車違反をしますと、レッカー車で車をもっていかれ、当然のこととして罰金を払わなければならない。犯罪を犯せば逮捕され裁判にかけられること。

カイザルの占めるものは、こうしたきわめて限られた狭い領域の問題です。それに対して、天のもの、地上のもの、地下のものなど、見えるところ見えざるところのあらゆる領域が、神のもの、神に属するものです。カイザルがどんなに絶大な権力があるといっても、全能の神が治めておられるあらゆる領域には手が届きません。そしてとうてい一人の人間の「人格の中心」「信仰の座」にまで手を延ばすことができません。

私たちの全人格、全存在の隅々まで支配できるのは、私たちが「天地の創り主、全能の父

なる神を信ず」と告白している創造主だけです。親であっても子供の主体性と意思とに一歩もそこに踏みこめない、不可侵な聖なる人格的領域があることを自覚しないわけにはいきません。ましてや、カイザルでさえ何一つ手出しすることのできない、聖なる、尊い、不可侵の領域があるのです。私たちの良心が従う場所。信仰の座。それらはこの世の地上のあらゆる権威であろうと何であろうと手が触れることが出来ない領域です。それゆえに、この領域は神にだけにお返ししなければいけない「神に属するもの」「神のもの」、それが私たちにあるということです。

確かに、デナリ硬貨にはカイザルの肖像があっても、そしてたとえ私が巨大な国家の中の1億分の一の埋もれるような小さな存在であったとしても、この一人の命、身体、この心はカイザルのものではなく、神のもので、それは神に属するものである。これが聖書から見た正しい世界観です。

確かに、かつて日本においては、「カイザルのもの」として、赤紙一枚で一人の人のいのちが徴用された時代がありました。「兵士の命は靴下よりも価値がない消耗品」として扱われた時代がありました。しかしそうであっても、究極的にはやはり私個人はカイザルのものではなく、神のもので、カイザルのものと神のものとは、こうして本質的に私の中で占める領域が違うのだということをクリスチャンである私たちは知らなければなりません。

この「カイザルのものと神のもの」とをはっきりと分離、区別する、ということは「神のものを神に返す」ということにおいて非常に大切なこと。むしろ「神のもの」と「カイザルのもの」をはっきりと区別しなければ、「神のものを神に返す」ということが私たちにはできないのだ、ということをお話させていただきます。

日本のプロテスタント教会の歴史、150年の歩みの中で、重要な出来事と私が思いますのは、内村鑑三の不敬事件であると思います。不敬事件は1891年です。1889年には明治憲法が公布され、ついで翌年の1890年には教育勅語が出されました。その翌年の年初に内村鑑三の不敬事件が起こります。

1891年1月の新年明けに、全国の公立大学、高等、中、小学校に天皇自ら署名した「教育勅語」が奉納されました。「教育勅語」は、天皇が天照大神に連なる神々の子孫であって絶対の存在であるということを教え、忠君愛国の臣民教育を明文化した聖書のようなものでした。それを直立不動の最敬礼という姿勢をもってお迎えするという、奉奏式という儀式が全国的に行われました。内村がいた第一高等学校でも、数人ずつの教師が全校生徒の前で講壇に上がり、教育勅語の前で深々と頭を下げて最敬礼をすることが求められました。

内村はそのことに先立って、「教育勅語は礼拝すべきである」ということを耳にします。そこで内村は教頭のところに行き、あらためて「これは礼拝ですか」と聞いています。すると「礼拝です」との返答が帰ってきました。内村はこれを聞いて「礼拝ならできない」とその良心が深く痛みます。先ほどの十戒の第一戒、は、他の神々を礼拝しながら、同時に創造主なる唯一の神を礼拝することはできない、ということをお話しているものだったからです。

内村は天皇の直筆のサインがある教育勅語を礼拝したら、自分の持っているキリスト教信仰をやめることになるという良心があったからです。さて内村は、この事態にいかに対処したか。内村が最終的に折り合いをつけようとしたことは、自分の番が回ってきたとき、講壇に上り、「教育勅語」の前で深々と頭を下げないが、少しだけ頭を下げたというものです。最敬礼はしない、しかし礼はする、ということで内村は何とかこの事態におり合いを付けようとしたのです。ところが折り合いをつける、どころか、とんでもない事態になるのです。このことを一部生徒らが問題として騒ぎ、不敬事件として、第一高等学校だけの問題ではなくなり、非難の声は全国中に発展していきました。確認を致しますが、内村鑑三は礼をしなかったわけではありません。深々と拝礼をしなかっただけです。それが日本中の騒ぎになり、日本の主なる新聞はもちろんのこと、地方新聞 56 社までいっせいにそのことを書き立てました。新聞記事に上がったのはその年だけで 143 回とされています。内村は、全国枕するところのない状態に追い込まれるようになりました。

まさにこの事件は、「カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは、神に返しなさい」という主イエスのみことばが、日本の社会の中でまともに問われ、日本全国の教会がこのことを問われていた。それは内村に起こった出来事ながら、彼個人の問題ではなく、主を信じる教全体が、天皇神格化、国家神格化に対して「イエスこそが主である」という信仰の告白が問われていた、そのような極めて重大な出来事でした。内村には当初そのような自覚はなかったようです。だからこそ、深々と頭を下げないでも、普通に頭を下げることで済むと安易に考えたのかもしれませんが。しかしその後の世間からは非国民として非難され、教会からも非国民として見捨てられる事態に追い込まれていくことを通して、内村は問われていた事柄の重大性を知るようになっていったのです。

内村鑑三不敬事件は、日本のクリスチャンや教会が、遅かれ早かれ問われることであったと言えるでしょう。内村は礼拝ということを開いて、「これだけはできない」とためらって、礼はするが最敬礼はしない、というささやかな拒否をしたのです。このとき「礼拝ではなく儀礼だ」と説明されていたら、最敬礼を彼はしていたのかもしれませんが、そのような詭弁をつかわれずに天皇のサインへの礼拝ということに向き合わされたのは、内村にとって本当に大切なことだったと思われまます。

1891 年という時代は、日本が天皇神格化、国家至上主義を深めていく時代です。しかし「私のほかになにものをも神としてはならない、仕えてはならない、ひれ伏してはいけない」という聖書の信仰に立てば当然そのようなことはできません。「わたしたちの主イエス・キリストの父なる神」(I ペテロ 1・3) 以外に、頭を下げられないと内村は知っていました。「たえそうでなくても」(ダニエル 3・18) と、ダニエルたちが最後まで唯一神信仰を守り、あの信仰を守る信仰の良心が、ささやかながら彼にはあった。つまり内村は、この時、不十分ではあったかもしれませんが、カイザルのものと神のものとを、何とか身をもって区別しようとしたのです。単に区別しただけでなく、神のものがカイザルのものより上位にあることを、身をもって証しようとしたささやかな抵抗だったのです。

内村は天皇を現人神とする国家神道体制のその悪魔性はこの時はあまり理解していなかったとしても、神のみを礼拝するという事は知っていました。ですから「礼拝せよ」と求められて、それをためらったのです。内村のこの時の戦いは、単に個人の戦いというよりも、もっと普遍的な意味、日本の教会全体が向き合っていることが、象徴的に現れていた、と言ってもよいでしょう。人のための国家が国家のための人となったこと。国家が一人の人間を神として礼拝することを強要する悪魔的な性格を帯びようとしていたということ。内村もそんな中であって、それを礼拝すべき対象でないと主張し、その要求に不服従の態度で表したということは、不服従という消極的な態度に見えるかもしれませんが、それは非常に積極的な意味を持っていたのです。教会やクリスチャンが国家に対して、あなたの権威はそこまではないということを教え、政府や地上の権威を正しい位置に戻ることを教える「大事な奉仕」でした。国や政府の権威は、そのような礼拝するような範囲は委ねられてはいないということを教え、国の権限の限界を御言葉に適って教える、という国に対する「最高の奉仕」をしていた、ということの後を気づくようになるのです。教育勅語に頭を下げるべきである、カイザルをあたかも神であるかのように尊ぶべきである、という世論の声高の中であって、それよりもなお高く、なお尊ぶべきお方、唯一の礼拝すべきお方を知るように、そのお方のみを礼拝するように。これは内村個人の問題ではなく、当時の日本の教会全体が向き合うべきことでした。

確認しますが、「神のものは神に」とは、単にエルサレム神殿に献金しなさいとだけ主イエスが教えられたという意味ではありません。銀貨には「神聖なるアウグストゥス」と刻まれていました。「神聖なる」とは「神である」ということです。したがってこの時も「神のものは神に返す」とは、「神とされている皇帝アウグストゥス」という主張に従わないこと、皇帝アウグストゥスは神でないという宣言をするということも同時に意味しています。皇帝であろうが、皇帝の母であろうが、一切の神ではなく礼拝の対象でもない。その支配は決して絶対的でも無限でもない。その支配の範囲には限界があり、神が託した使命に仕えるべきものです。国家が人間を人間として扱わない、国家の目的のために人間を手段化する、一人の人間を神聖祝する、絶対化する、独裁化する、神的存在としてあらゆる力をもって礼拝を求めてくる。国家は時に、このようにおごり高ぶり、悪魔化します。より大きな権威をふるうために、人々の良心の上に君臨する良心の主にまでなろうとします。考え方を政府の意向に従うように統制し、それ以外の考え方をすることを禁止したりします。そのような時に、カイザルのものと、神のものとを冷静な判断力をもって峻別していく。カイザルを絶対化せずに、それ以上に尊ぶべきもの、礼拝すべきものがあることを、教会とクリスチャンが全力を挙げて世に告白して生きることが、その時代に主に召された者たちの国家に対してなされる最大の奉仕なのではないでしょうか。

周囲が狂気と化する時にも、教会は目覚めて、神のものは神に返すこと。そしてカイザルに返すべきものはどこまでか、という限界をわきまえ、カイザルがその限界を逸脱する時にも、その限界を教え、神のものを、カイザルのものとは絶対にしないこと。そしてカイザル

に委ねられた権威についてのことであっても、それが、神が委ねられた目的に適っているか、否かを常に判断し、考え、それが神の御旨に反している時には、それを批判し、不服従によって、さらに上なる権威である神のみ言葉の権威に服従するという。今年には戦後 75 年に当たる年です。この歴史の節目に、かつての破滅の道を再び繰り返すのか、大きな分かれ目に私たち日本社会は立っているように思います。

カイザルのものをカイザルにかえすということ。それは国家がどんな要求をしても、白紙委任状を出すように服従するという意味ではありません。国家の権威を立てたのは神であるということを知っているということは、国家を立てられたキリストの御心があるということです。その本来あるべき神が立てられた国家の役割を、私たちが証すること。カエザルに返すべきものがなにかということを経験すること。税金を払うことと並んで、キリスト者だけがなしうる国家に対する奉仕であると思います。本来「カベザルのもの」「カイザルに属するもの」の中に私たちが「伏し」「拝み」、「仕え」、「礼拝すべきもの」などは何一つありません。「あらゆる舌が『主イエス・キリストは主である』と告白して」（ピリピ 2・11）一切の栄光と誉れとを主に返す。そのような「神のものを神に返す」教会になるということは、祈りと聖霊の助けなしにはとうていなしえないことではないでしょうか。父なる神は祈り求める者に聖霊を拒まれず、豊かに与えてくださると約束してくださっています。であればこそ、私たちも熱心に聖霊なる神に強められ「神のものを神に返す」ものとなることを熱心に願い求めようではありませんか。

古の聖徒たちを強め、神の言葉とその信仰に立たせるように導かれた主は、今日においても主に願い求める民に聖霊を豊かに与えられる神です。そして私たちの先輩たちが欺かれ、主の御心に従えなかった負の歴史からも、私たちは大切な教訓として学び、現代にこの地に主の教会を建てるということの意味と使命を教えてくださいませんか。

この日本の社会の中で、教会がどれほど少数であっても、埋もれるような小さな存在であったとしても、この「神のものを神に返す」教会がこの世の中に埋もれることはありません。その信仰の告白は、あらゆるものを押し流す世の勢力の只中であっても、神の言葉に立つ存在ではないでしょうか。